



北窓瑣談

後編卷之二

4 5
234
6



北窓瑣談後編卷之二

梅華仙史橘春暉著



門1音5
294
卷6

八橋檢校築紫箏式より彈し今の組よりよものを作る表裏
 十三曲を右組より表組よりハ落梅々々 公晝 為雪
 天下太平 雪朝 雲上 此七曲をよ裏組より 為衣
 桐壺 須广 四季曲 扇曲 雲井曲 此六曲残りよ
 初ハ如此小表裏と二等よりち有りし後ハ四等小分
 ち新曲より事や色々哉加ふとぞ調子より組を彈むるに一
 越乃符を宮より立て合せし佐人の夢よりお為るより多
 き越を月白箏ハ二乃經宮かり

第一絃 黃鐘 二壹越 三平調 四勝絶 五黃鐘 六鶯鐘 七壹越

八平調 九勝絶 十黃鐘 斗鶯鐘 伊壹越 巾平調

此調子箏の常乃去々魚なり又雲井調と云ふ

第一黃鐘 二壹越 三斷金 四双調 五黃鐘 六鶯鐘 七壹越

八斷金 九双調 十黃鐘 斗鶯鐘 伊壹越 巾斷金

又中空の調と云ふなり

第一黃鐘 二壹越 三平調 四勝絶 五黃鐘 六盤涉 七神仙

八平調 九勝絶 十黃鐘 斗盤涉 伊神仙 巾平調

一元の侍人陳字安南の使として其國の事を伝へりし中鼻

飲如銚滴頭飛似轆轤云々近年本邦の安南の事物

語季々傳ふきいり。後ろ角の事成ふを。陳字く又

轆轤なる轆轤なるなりしや鼻飲と天竺の昔よりいへり

款門の徒養生の術ありとて今も鼻より冷水を飲

む人なり

一魯仲連曰貴於天下之士者為人排患難解紛亂而無取也

即有取者是高賈之事矣 浪花かしの男立といふ者此氣

象なり。実小男子の姿を象たり。況や学文ありて道を踏

つゝ此事を以て大丈夫といふ

一北畑信雄と土野文信包と信長 舍弟お義とて南伴勢北伴勢

と畏を改んとして雲出川を名男おせんとしていふ。或は人

曰尚西南北の界ハ古邪ハ

風早の池乃流きよの志たし早々阿濃と幸志の界之たり

如此ゆいとヤセー久兩將を識み従ひ定められしごとけ時

信雄と大河内ハ在り。信包ハ津ハ在りしと塩尻ハのせり

一寛政の初ハ和泉ハ貝塚乃人岩橋善多南日月星辰成る

有る^{つらえんまき}望遠鏡を自ら乃工^{しやよ}具慮成以て作り出せし^{しやよ}望遠

鏡出く後二三年有る^{やんが}阿蘭陀より十クトケイキルとりふ日

月星辰を又る望遠鏡を海せり浪花乃人此十クトケイキ

ル^{しんざう}球^{せんせん}免ほく余が^{ちやうやう}明^{ちやうやう}ある一後せり。是又る所の日月星辰ハ

真象^{しんざう}^{せんせん}密制の目鏡と若き^{ふせう}密制せし目鏡と符節^{ふせう}成合せるが

しくこと善き^{まじ}清作も長大なる^{まじ}取ハ一ハ明^{まじ}白^{まじ}まじ^{まじ}勝^{まじ}を

里と云。余が家ハ若き^{まじ}清制作の望遠鏡ハ所持し^{まじ}て其^{まじ}精^{まじ}

妙^{まじ}なる^{まじ}ヲ^{まじ}我^{まじ}知^{まじ}る。密^{まじ}製^{まじ}の物ハい^{まじ}ふ^{まじ}と^{まじ}又^{まじ}是^{まじ}の^{まじ}先^{まじ}年^{まじ}より^{まじ}密^{まじ}製^{まじ}の

望遠鏡法所^{まじ}ハ^{まじ}あり^{まじ}と^{まじ}唱^{まじ}き^{まじ}も^{まじ}皆^{まじ}虚^{まじ}説^{まじ}也。余天下^{まじ}ハ^{まじ}歴^{まじ}遊^{まじ}し

て^{まじ}尋^{まじ}し^{まじ}し^{まじ}る^{まじ}海^{まじ}人^{まじ}所持^{まじ}し^{まじ}る^{まじ}を^{まじ}又^{まじ}る^{まじ}て^{まじ}其^{まじ}り^{まじ}に^{まじ}善^{まじ}き^{まじ}清^{まじ}日

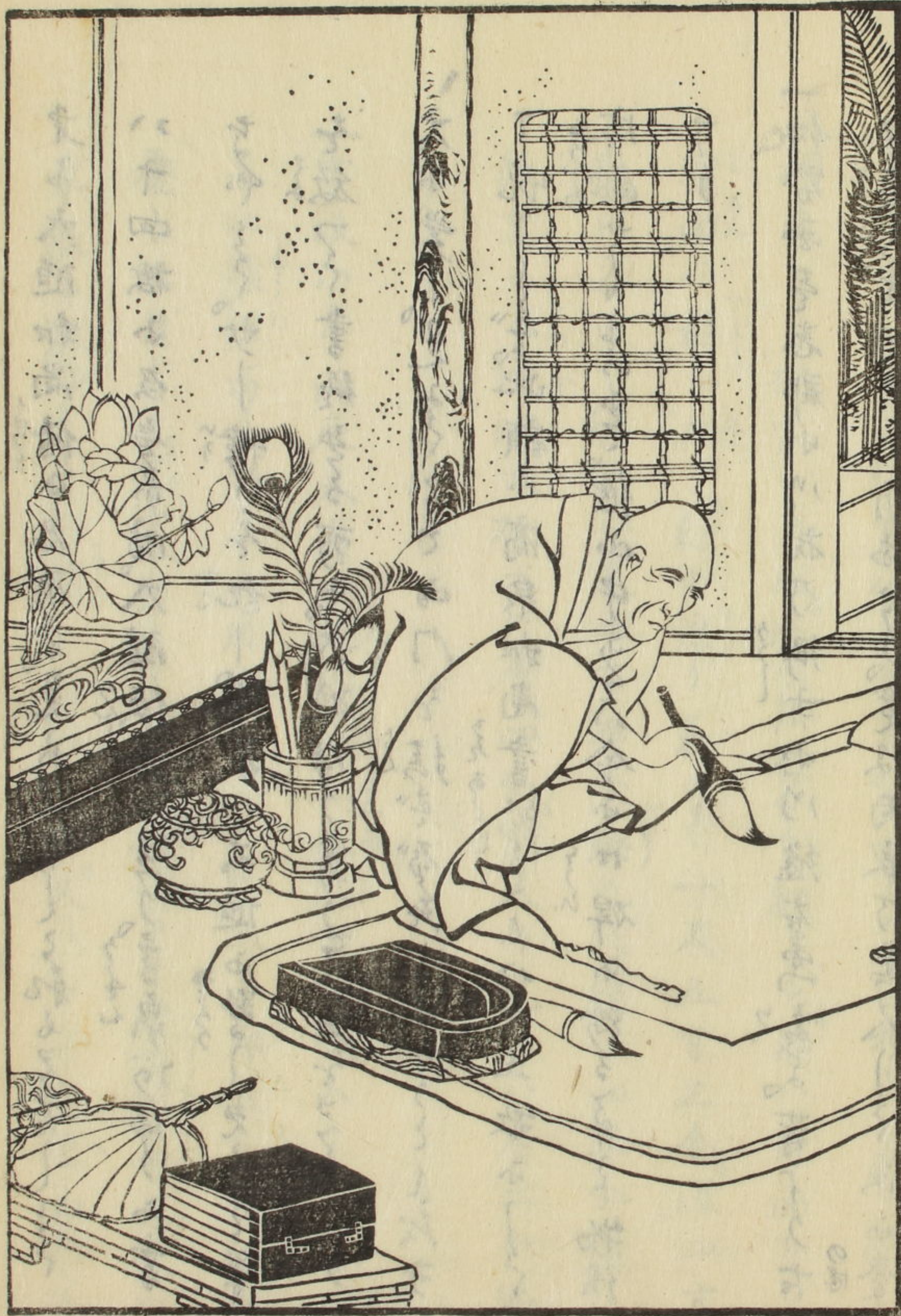
本^{まじ}より^{まじ}始^{まじ}て^{まじ}作り^{まじ}出^{まじ}せ^{まじ}し^{まじ}紅^{まじ}毛^{まじ}玉^{まじ}より^{まじ}も^{まじ}海^{まじ}より^{まじ}其^{まじ}り^{まじ}ハ^{まじ}時

運^{まじ}の^{まじ}開^{まじ}る^{まじ}時^{まじ}高^{まじ}し^{まじ}り^{まじ}し^{まじ}る^{まじ}の^{まじ}奇^{まじ}妙^{まじ}なる^{まじ}こと

一余宇治^{まじ}ハ^{まじ}幼^{まじ}少^{まじ}の^{まじ}毎^{まじ}日^{まじ}泉^{まじ}禪^{まじ}師^{まじ}の^{まじ}出^{まじ}せ^{まじ}し^{まじ}黄^{まじ}檜^{まじ}山^{まじ}の^{まじ}山^{まじ}門^{まじ}上^{まじ}

ハ^{まじ}掛^{まじ}る^{まじ}第一^{まじ}義^{まじ}の^{まじ}額^{まじ}を^{まじ}感^{まじ}じ^{まじ}し^{まじ}る^{まじ}事^{まじ}成^{まじ}遠^{まじ}く^{まじ}ハ^{まじ}結

する^{まじ}ハ^{まじ}松^{まじ}葉^{まじ}道人^{まじ}等^{まじ}。高^{まじ}泉^{まじ}和^{まじ}尚^{まじ}此^{まじ}額^{まじ}を^{まじ}書^{まじ}し^{まじ}同^{まじ}高^{まじ}泉^{まじ}乃



ゆゑにや何れも一何れ希代の盛事なりと号する上諭有り。乾隆帝より乃上諭と見え。板行ゆゑ唐土普く頒賜り長崎へ渡り来る唐人の持て来りたる。余も名傳てて医学院ゆくんせし事有り。扱出しく外小絶を

一春暉七八才乃時或夜父母の傍に在り折りて先考孟子を讀居玉の一残るを又見ふ幸小何事と志し何れと尋なり一也。先考海舟の續て父を痛しと。以年代牛の章を講し曾せ玉のふ培ぐ一何れも受て位居たり一也。先妣も又もの又為流しものぬ。是より先考の頼ひなりて折く孟子を笑や。論語あり及び。學問を志す事と人ありぬ

此以子才案の彼章を講するを笑く三十五六年の昔を今の中ふ思ひ出。父母の恩義乃深死を新あるや小笑く

一香川太仲着る。時治療の為小奔走せり。小はゆの途中小水を使せり。無。門人のある故を問ふ。家家に論り便所へ便せらる姓の耕作を利するなり。奈何を途中無用便しとんやと答ふ。を伴え来豪放の氣質なり。志を所深切と。殊勝の事なり。一寛政八年丙辰奥羽南部の船漂流し。安南島に島あり。を被承り唐土へ送り。年々の去長崎へ送り戻されり

難風小逢あひ一より三年ふして日本に海をりとも。安南国王
明主あきふして在位も久く一つ寛政丁巳。彼國あくも景光五
十六年とも。景光ハ安南の年号なり

一是ハ寛政七年冬唐土蘇列海濱の獵船を風の吹
流と色を真列仙臺の領分乃海濱に漂着せり。丙辰の春船
中の漁人七八人。仙臺城下に召寄られて蘭東に御伺を
至御沙汰のる日伴も唐人も皆く仙臺城下に逗留せり
其魚乃役人と志村藏とて。先年法必漫遊一つ京師
あり久く逗留せし学者なり。仙臺候の儒負あり。真列り
唐人の逗留せりハ路に死るありも。法人又物ハ行き遺迹

を乞ふ又ハいはるあてより詩を寄せむにせしゆの元来漁夫の事を
ききて乞文音少く手跡も又苦くく詩ハ續を以て難義せ
しゆ。為藏教一つ手本に成て法人の乞ふ意一物
或ハ扇面に成て去しゆの又逗留のる所跡なれて詩作成り
教々るに。後ハおおせしる跡も上達し詩を作り。景光其内
二三人ハ絶句にむむ加ありて作るやり成せり。ハ戸乃
御下知むく後を傳へ送りきる時も。為藏送りの役
人知る途中に。解分むもあり。又絶句むも數者作りる
藝列の知音より余ら方ハ心を途中の作を解分むも成去字
一つ贈むり。彼亦不得り日本にく手習学問せし一つ成



嘉三



物得ては彼玉の人奇とを希し解ハ日本の面目也

一紀西南秘院殿ハ名なき武將ぶしやうとありとぞ今余彼

西小遊びく又小和歌浦道の堂塔どうたうの模様又橋葉嶋はしはなの

中より風流をそそられたり又城下より和歌浦へ出た道あり

大石小大書して文字を彫付られ朝あさ鮮せんの李梅溪りばいせきより出

たり又和歌浦の向ふなる管の為あり石面いしめん法ほふ亦小李梅溪

の文書を彫付られたり風流乃幸なり保小名言死大將

ハ文事あり疎く後浦ごうらとせし

一余ら友紀仔の家中小野のり呂何某秘藏ひさうの眼差まなざしあり金乃象

眼銘まななより真田左衛門まのた等之乃字あり上小後塵ごじんの二字是

一象眼しやうがんより入せり。其田の銘なあり也。作ハ字多玉次むつぎあり

一糸玉いとたま廣ひろなりたり。又玉乃象眼たまのしやうがんより入せり。真田幸村ハ

武界ぶかいのい思しひひ。後塵ごじんの二字風流乃銘ななり。と時乃武

夫乃おたふたふなり。此眼こゝ高登たかとうより出たり。傳來とらし其宝

刀やいばなり

一紀列の士小田何某近在江鎧えがよろい一領を有り。其鎧よろいの寸法

皆白石先生乃著あかし軍器考ぐんぎこう中の楠公乃鎧くすのぎ寸法すんぽう

遠とほりて小田子秘藏おのこひそくして愛玩あいがんあり

一大雅堂の画蘭亭うらんてい歸去来ききよらい西園雅集さいえんがしゅう皆小指さし贊さん辞じなり此三

幅ひろを七十五金ななご小求こもとあり。佐候さごうより。近世きんせいの書画

あつかり科ハ筆も及ぶ。大雅堂の書画乃其類也。又尚今都鄙にも書画流りゆき。倭画幅も紙表具なり。

一肥後西八代ちちゅうの士西垣氏。寛政六年長崎より古琴をばり。里宋銅乃琴も東坡所持の物あり。西垣も紀張佐其圓様を摸せり。余も人より傳へて同ハ真物なりやい。

一浮勢小柳うきせの湯乃菊小倭郷中佐田村より所小紀貫之乃塚ありいのちりし。

一紀効新書ハ明の戚南塘の著き所より兵家有益の書。

又此同人乃作小煉兵諸書といふ書一帙あり。小南紀乃

小田氏の家あり。此去を一見せり。珍書なり。然るも類

らハ戚南塘の武名張借りて明末の人偽撰せるものあり

り。紀効新書の書あり。此類ハ何れも

一魯土より佐國小祭り所の孔子乃像杏壇の墨多あり侍

立の牙子十四人何り東涯の説ハ十哲小曾子有子子張

子羔をかしひふん。と云ふし。近江に西小

川村蘇樹書院所藏の杏壇の墨をより小亦十四人何り李

休和の画なり。侍印也。又蘇樹書院所藏の釋

祭乃式をより卷物をより小十哲小曾子有子

子思孟子と池なり。此巻物の明末の物と見ゆ。悦東屋乃
悦小吳なり。いばきう是なり。命とや

一薩摩小一士人。有り若た以り常人小吳なり。て深く佛道を
修し。とらう。每人相善薩と稱し。世事を意とせ。と奇吳の
人なり。佛画をよ。多く画り。又経文乃文字を細出り
し。そのほ。佛像小。小画を信公の人。小附子
を。雲々の行御。ハ多く彼小。ハ。此人を拜。と。け善
薩。或時別府。蔵。物語り。せ。ハ。夜。人。静。り。禮
禪。親法の折。善。を。見。若。た。女。乃。夢。し。三。味。線。を。弾。と。端
哥。を。艶。よ。う。う。た。ふ。を。遙。小。夢。と。何。と。く。公。物。の。なり

まの。一。り。美人を。見る。あ。勝。せ。り。我。と。ん。か。の。一。見。下
た。く。年。若。れ。人。と。深。く。志。を。怯。む。命。た。事。小。と。そ。と。ま。し。
と。考。し。と。一。蔵。余。は。語。り。た。若。蔵。と。薩。摩。の。人。と。余
彼。小。に。在。り。一。以。殊。小。親。し。一。交。り。一。人。なり
一奉邦の俗十月を神毎月と。和書を悦人種。の吳悦。を
ま。し。も。皆。季。強。附。會。の。悦。小。一。信。び。ら。小。写。り。を。余。考。ら。よ
奉邦。伶。倫。家。用。の。律。呂。の。配。尚。壹。越。律。を。黃。鐘。律。小。尚。て
十一月の律。と。お。ふ。十月乃律。ハ。上。每。律。小。尚。ら。是。小。依。て。十
月。を。上。每。月。と。よ。なり

一池。民。和。歌。山。より。二。里。ど。り。東。小。岡。田。と。上。所。あり。と。地。小

素系角之進と人なり。素系彈正少弼乃後胤ト曰
家なり。其家小昔より其山の琵琶を拵傳く。今小あり
珍藏せりと其家の聲浪花河内を三右衛門物格なり

一宋の即耕和尚大徳寺の祖南浦を送る信り云 相送當
門有脩竹為君葉々起清風 白隠和尚此信を續て喜て

曰得言緒三昧その後白隠和尚僧徒小佛法を説示と云
自由をほられしと云

一准南子小文王十五歳にして武王を生むと云るせり聖
人ハ天地の氣を得ると云るのあれハ其陰陽の氣
も又充る事の早き小也

一碁の法ハいある物小ヤ和漢と云に古の法の絶ゆる変
こぎ残念あれ外科大成をどかり取の碁の法ハ笑
ふべきの甚しき支あり

一才多ハ日本のもの為小勝せと上品なり。唐土の産な
し日本乃才多あり。似もよと云。同一日本の内あり云
甲乙何れ一國の中あり其地の差別一何れなり。浪花の
藤田氏所拵の茶園振呂中山の近遠ふ何れ。其茶園の尾
林村小産と云。早衣と。本之部村小産と云。才多。終小二村
乃同ニ里料を隔てたる小。本の部村の産と格別上品也
同一科同あり。重き小云不同ありと藤田氏物格なり。是

あくも名医別録の半量乃量のそと符合せざるを知らず
黄連茯苓も日本の産万圃小勝せりといふ

一浅見細谷先生赤心報國といふ四字を彫付た刀成常小
帯せしきしつ居しが浪花の幕田伴達此刀成傳くはて
所持せり余幕田氏少くも幸成はたり。伴賀守金道り
作あり。長二尺三寸幅一寸三分より四分深たヒあり殊
の外乃大物なり。また赤銅の一枚を死して其をその裏
表に赤心報國の字置よふるえり。指書たり。細齋先生
自筆のより西依成亦先生寛定の派去れり。銘も
鉄乃まりの角錐を厚し縁頭を鉄より唐料を金象眼

小かー入きり柄ハ元結巻なり赤心報國の四字ハ岳武穆乃
脊中小黥一居りし文字なりといふ

一浪華の松本周助奉時道人と号する人の家小三足の蝦蟇
乃乾物あり。法名家の詩文ありて實小奇品なり。其後の物
語り小を奉又六脚の蝦蟇を好しと天地る毒た物と
いふぞとらふなり

一河内西坪井家の社勢多田修理ハ石川原氏乃後胤なり
古器物多く所持せり。ハ幡太郎の弓もあり。楯無しの鎧
もあり。神功皇后乃銚も有り。其銚長刀の如しとて西坪
乃其金物ありて柄の傍小字を付たるものなり

憲廟 有德廟の御時み入上覽み入るるものとき

一伊勢山田外宮の宮崎の御文庫に儀藤太秀卿の太刀五

有德廟の御時上覽み入本阿弥鑿定を磨くものとき

牙を磨く免官より白鞘を賜ふかり作る神息と云然

とる銘ハかり長二尺三四寸許直燒なり柄と牙と同

鉄めく連りたるものなり頭の紐を抜きり金物を去る

鐔頭の方へ抜るなり柄の鉄厚サ三分許元來の鞘ハ木

綿めく包み流を塗たるものなり奇製の物なり

一伊勢松坂の西三里許ふ日川といふ所より此所ハ五輪の

石塔百餘あり中ハ一月然石ハ唯有一乘法といふ五字を

彫たる石何れも字ハ文字なる塔なり傳へる平家六

代御前の石塔なり又文覚上人の碑もありといふ日川

といふ村ハ堀坂山乃麓矢下村の隣村なりといふ六代御前

の舊跡といふといふなり

一寛政九年丁巳九月伊勢玉擲田より異獸とほたり民家

乃井の中ハ虎なり虎捕はたり形北狗のく毛色茶

褐めく細微の雜毛あり四足乃爪鋭めく鬚の爪ハ似

とる面長く目ハ赤く人々名残をすなり其後下総

乃猿人ハ活きりハ彼西より一と云ものなりといふ

と云伊勢山田のニアミと云獸なり狸の大なるものハ似

たり彼井中山為なるをコアニゆり行くと我友人揃
田乃奥田太民物産なりた

一熊野海濱より三大邑有り本乃本 雄勢 長崎と云皆

千軒の所なり此地狹隘なり此の頗る富饒の地なり雄勢

本と本辺より浪花へゆふ間道の近なり嶮岨を越て

大和国吉野郡上布村の出る仕者ハ二日して上布小達を浪

花より四日洛まで達す去の日ハ多て仕者ハ三日ゆり達す

と云此を越て峯越と云王臺山の一里西に居て行々

地を王臺が辻と云越が峯の南乃方小石二筋有り一筋と

池の嶺通りと云山乃嶺小池あり池中小神と云有り

又池水の中小浮木とい物ありて折々此浮木水上小遊

舟を時ハ必大風大雨等ありとなり

一王臺山ハ熊野の奥小嶺と云和及吉野郡の深山中の言

山なり修勢の言川熊野の新宮川紀列の紀乃川此三川

の水源なり中王臺南王臺北王臺乃三峯有り中王臺ハ

最々一となり

一熊野ハ東西に長く百里近一熊野とも南北に狭く海

濱より小舟入るる絶ふ五六里六七里なり大和国吉野郡

なり中より東にハ修勢西なり雄勢の山奥ハ柳の平地

もかく六七里のるも民衆あり木の森と山奥小石ヶ村

許しありて一里半里に必民家あり柳はくの平地に
 ありき水も四五丁と歩閑たたる平地に絶てり
 一承久二年三月朔日御琵琶合あり其記録巻物と判乃
 初等詳なり奥書小西園寺相國公相公御自筆の本と以
 て書寫を持明院三位宗時卿許可門人井上光美書と
 又之たり
 琵琶合十三卷

- 壹卷 左末法 右并手 持
- 二卷 左木繪 右小琵琶 持
- 三卷 左花園 右狗犬 左勝
- 四卷 左賢象 右三等 右勝
- 五卷 左十二時 右新御お 右勝
- 六卷 左大鳥 右黃菊 右勝
- 七卷 左大唐花 右御前 右強持
- 八卷 左三日月 右小唐む 右強持

- 九卷 左白竜 右新白象 左勝
- 十卷 左犬引 右毛長大 左勝
- 十一卷 左眉橋 右大紫檀 左勝
- 十二卷 左良道 右元真寺 右強持
- 十三卷 左玄象 右牧馬 格別之蓋物不及 勝負之汝汰也

一延喜の御物小名物乃御琵琶十七面有り今の幕亭家小
 御所持乃巖と云琵琶ハ此十七面の内有りと云
 一當今伏見宮の御秘藏の身乃御琵琶を大虎と云今八甲詔
 多ありと云先年拜見を頼り小 花園帝の勅封あり七日
 潔齊して拜見せられたり 宮内少御潔齊有りて御用封
 乃よりゆき新成や多ありと云より次乃御琵琶小孔在
 かくり小名物多りと云

一村兼といふ琵琶甲がかり琵琶。佐勢山田古及具やみり
 草出草ゆきおき兼と甲の裏ゆえおきと續て古道
 具の舎たび毎ゆいおき終ゆ四か三分はゆり買いり
 二三年も五いが。後ゆ尾張の人買いりて村兼おるふと
 知り。今後に戸の方へ金七十五兩ゆりきりとりり。今
 ハ何人乃ゆいゆいいや

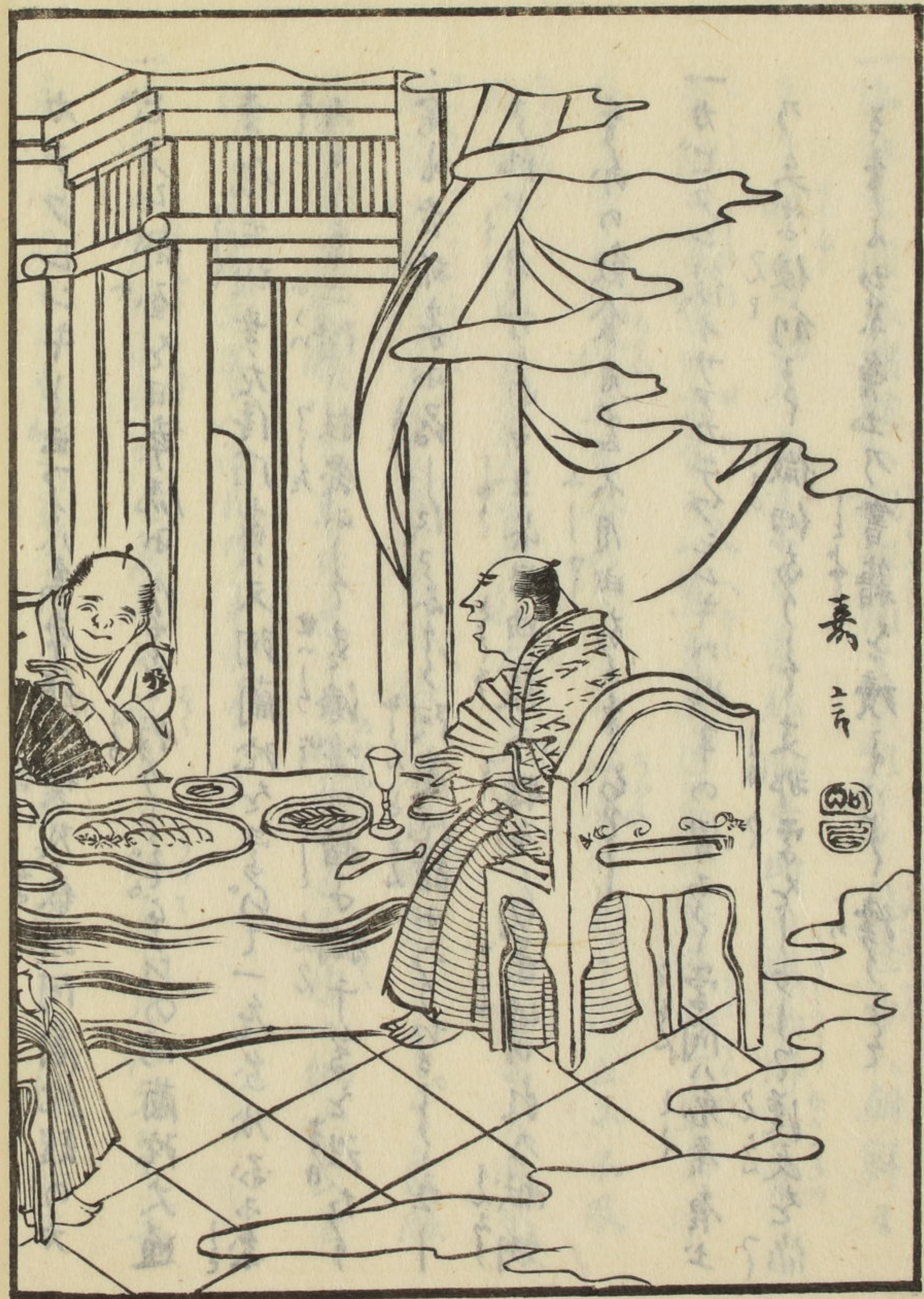
一寛政十年戊午の年正月大隅玉の人池田玄冬上京して余
 の家ゆい返いみり余り為に木の下乃琵琶を写して新ゆ琵琶
 一面を作り終いる。始て都ゆゆり造りたりとて琵琶乃
 銘を美耶古と名付り余が家の寶とて

一澤庵和尚ハ道義乃外具兼事ゆゆ乃と名まき。折婦
 和歌も尺ゆき道歌ゆりのものゆり。兼人のゆりやをゆり
 少やと思ゆゆいゆい。和歌の道ゆゆゆゆゆゆゆ
 丸光堂ゆ脚点の百着ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 了いたいく杜鶴の歌

丸ゆりの年ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 光堂ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 子。馬丸光堂ゆの脚点ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 殊に卓越ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

一安永年間或緒候へ朝鮮国より粧々々 乾隆帝へ朝鮮王
より献上の物りよりやく系部御幸所の彫物師長常へ
赤銅の香爐の火盆ハ八重葉乃さかしを至極丁寧小中
付りきりり。價五百金のよりあて地金のよりハ云小不及
彫物の丁寧を帯一生の精力をそしと造り裏小大日本
越前大振長常と金の象眼銘成入を贈りしと。今象眼
小千キリ象眼と。年次居ては接尾ぎる手際細工小入色
たりしと是等八面月乃りなり
一日奉の戸隙子懸など。屬小勝きり勝手よれ仕なり。安
永天明乃り小長崎へあり居一阿蘭陀乃カヒタシ役イサア

カテワレニキと云つハ云奉邦の製成慕ハ阿蘭陀館の力
ビタシ部を日幸流小作をりしと。今ハ阿蘭陀大通
事役吉雄孝左衛門家ハ又阿蘭陀をさびて一屋分派小
尾中二階ハ板敷小しと。漆塗の指子揃千等を没たり
余小吉雄家小居しと。今ハ阿蘭陀館小入りしと。今ハ
これと云ふ小も至崇皆曲簾小腰をりけ。柔内の終乃献酬
生外の飲食も至不自由ある事あり
一カビタン役イサアカテワレニキハ好事の男あり。学問ハ兎角唐土
乃文字便利より微細ありしと支那字をいかりし漢文を依
る事小物集集ハ乃書籍を續りしと。今ハ



美言



二十

多く入るく土器二好小火成点一火氣と火氣お接し
とるやう小多々又三室荒神といひく一ツ土器火成三ツ
より火氣お接する中ふまらるるなり。是を燈火の火入る
所然もとも強て埒ハ入る。然もあまなけを上へ向て井
乃しく穴成穿ちて煙を通し或ハ横さる小隙乃穴お埒りぬ
れを氣を通せしむ。又最初より埒の方に穴も毎ハ山もく
上り穴を穿ちがた時ハ埒煙と名付く穴二ツ並を埒り
入る。之ケフリと埒煙の云畧言やと一〇穴乃中
入る燈火昔ハサハイ殻小火をとりて入り。今ハいりやう
振廻しとも自田わたりて油のこけきさる土器ハ竹の柄を付く

持合かり燈心草ハ凡三四十筋も入る。〇山氣の病人ハ
温補の薬を忌むも一人参はくても用る時多し死する
こそ〇金を埒り古穴年久あれを岩間より莫泥流
き出く漏り流るるやうに禹餘糧のくく石中莫のくく小成
る。是或佐後也ハスホウ石とりよ。スホウとハ蘇木とりよ
赤た石と云心と云く云と。然も石乃色ハ莫褐色なり
薩摩玉のケイ子と云く。或もサ摩のキ子ハ口口大
小異あり〇穴の中ハ金を埒る者の外穴乃岩る處に
本より見成埒りて埒所ハ入る大工なり。又埒埒り
ハ多々く埒りて埒りがた水を之を役目の人とあり

水を久出を乃皇統骨車の如たもの所くより以上乃物後よ
嶋川生れ拍燈なりた

一 体和尚の母君末期小体和尚へ贈るをさるる毎の字々
学丹新れ持修く非くを信りて他を空文云

我等樂望の縁る死無為の都小赴の御身よれ出家小成
里の佛性の見成磨たを眼より我等地獄小居るる處

さるる不取帰る不縁ると見あふり。釋迦達磨死小好と
たりあふる人の成りあひり俗あるも不若し。佛四十餘年

経法。一の終り小一字不説と空一六。我と見我と悟る
肝要に何事も莫妄想。何あうと

九月上旬

不生不死身

千華丸とあへ

久きく方便の便のて我身の人と華美出と同一事小
ハ系の依聖教とそふ續て佛性れ又我磨る人そい

あふるの事も解しとさかす
是とくもかりそ免ちぬとれ天かことも又よ水壺の体

一文湖洲竹詩一字至十字為句

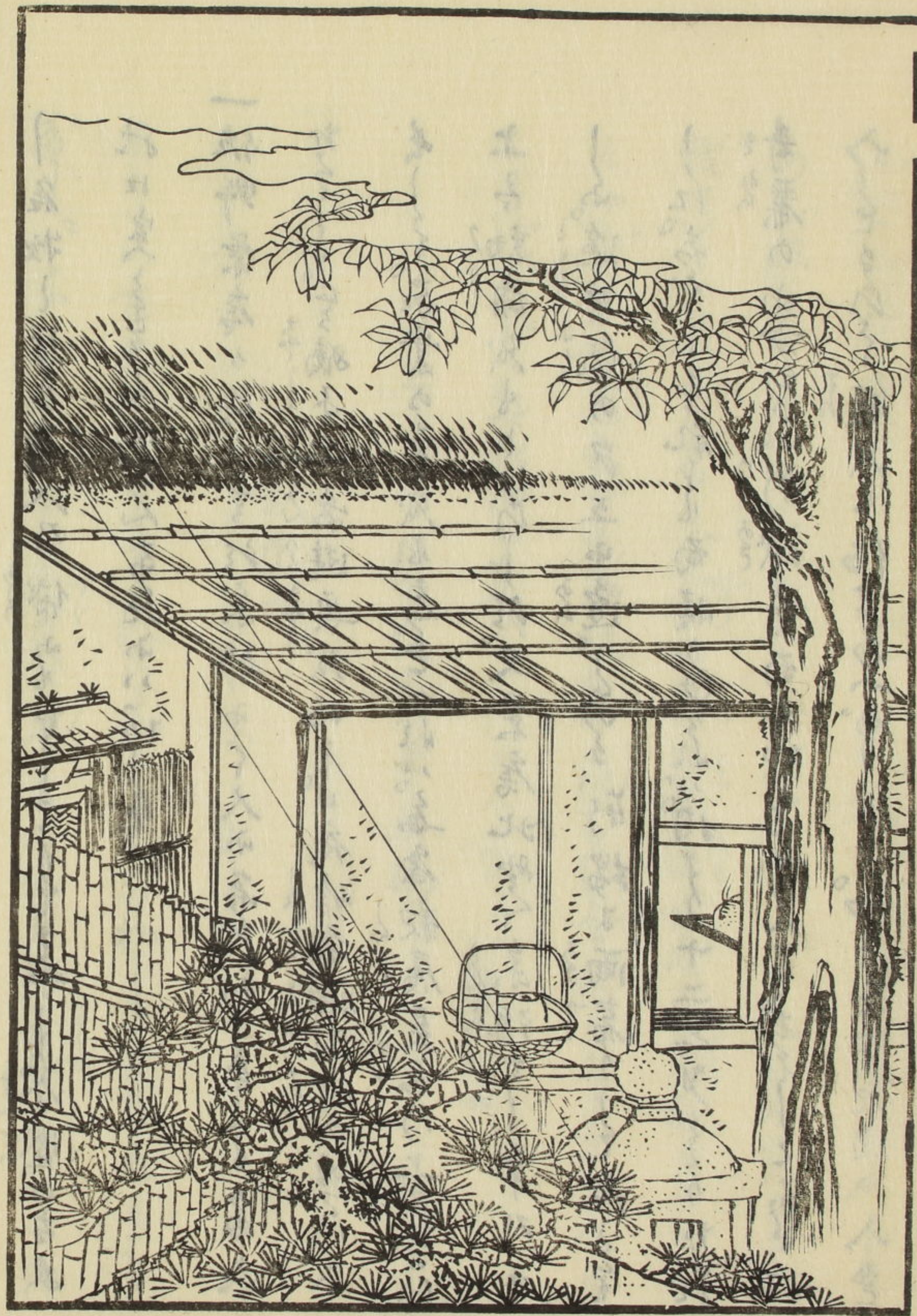
竹。竹。森寒。潔緑。湘江。頭。渭水。曲。帷幔。翠錦。戈矛。蒼玉。心。虛。異
衆草。節。勁。踰。凡。木。化。龍。枝。入。仙。坡。呼。鳳。律。鳴。神。谷。月。娥。巾。帔
靜。尊。々。風。女。笙。竿。清。簫。々。林。間。飲。酒。碎。影。搖。鐸。石。上。圍。碁。輕

陰覆局屈太夫逐去徒悦椒蘭陶先生歸來但尋松菊若論
擅樂操無敵於君欲圖瀟灑之姿莫賢於僕
一東我此官庫小三条宗近相別正宗等刀劔極意傳授此秘
書或謂之我此亦官庫小秘一益人八益也一辨治の法能
我撰之借り多へらねて授けり也然るを以て御法傳を
以て刀劔鑒定の達人神田白童子に令ざれ寛政丙辰年
白童子の吹拳小依之同幡壽格を遠く東武に居る彼秘
出と借り多へらねて壽格今度此撰り達しと辨治の法小
とて規模の事なり

一寛政年間京都二条新地二王門通り小黒田傳幸邸とて刀
辨治あり此人のハ包丁等刀此類の辨治なりが人の
周利あり後々辨治の名人のハ包丁等刀此類の辨治なりが人の
より秘傳成りて寛政の初より刀辨治となる此傳鋼鐵は
多のハ包丁等刀此類の辨治の名人のハ包丁等刀此類の辨治なりが人の
ハ別流なりとて其刀より鉄成切る名作の鬼ハ鐵ハ鐵乃
札等成切し泥のしし六寸釘など成切るも此の人の
説に戰場に用ゆる刀劔鉄を切らざれを益あり燒又中心あり
乃上より下より等々不平等成綸なるハ益益なり焼又
ハ細工物なりハ包丁等刀此類の辨治の名人のハ包丁等刀此類の辨治なりが人の
切き味の為ありあるとて中心のヤスリ目などより益あり

つり況や二三百金此のハ種本屋のか一子廻る家小を
皆待へし。奇中の怪事といふ事。是も商賈の業利に射
るが為小彼家此多ちを成此家不賞。い方のちるを成
彼方小賞むむきるたひ毎に。怪くを價お増して終小如
小ふきるなり。是もそのも蘭の青品牡丹は名花なり。價百
金小高るものありと人の物幣小なり。世に百金乃外に
物一草ハいふと笑も及ぶなり。世上利成食るを云い死よ
りかる怪事も出するものあり。一又八山山山山山
一江列山田乃浦は木之内古繁修勢乃山中云作浪石の加
嶋屋原をきぬなり。奇石を集め待る名なり。其外あり三

都の中は好事家候玉の逸人藏石は名小言た人近年
一余も徳家の奇石をとり。皆一家の藏るも三千五千種
あり。五日十日乃力成をとり。服成をとり。成好なり。其
多知はゆも格別小同成語を程の珍奇の物ハ毎死ものなり
源をきぬ物幣中。送一年北西より人なり。奉の大きの夜光
乃玉のり。一室成照るを。上死價ありと夢人といひ。小即
屋小主人に托し。玉求多し。暗夜小を玉の入り。箱乃
肉許里白丸なり。又ハ金五十兩小求なり。又玉を。暗夜
小大なる文字一字中。續好しれ。金百兩小求なり。又
玉を。出狀成續好し。三百金。一室成照るを



て彼所こゝふらふいをままつるあううとりのれれハ業業序序大大おおりたりふ子
乃乃公公記記せせるるるる程程なり。我我もも公公勤勤なり。かかふふかか書書ふ具
一一たりととと恥恥辱辱ふふ一一つつとととと。ややがが親親をを一一とと表表向向ふふ一一
へへきき嫡嫡子子乃乃書書ししりり一一たりととと佐佐伊伊のの家家義義へへふふるるもも
於於子子孫孫續續たたりととととと

北窓瑣談後編卷之二終

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

